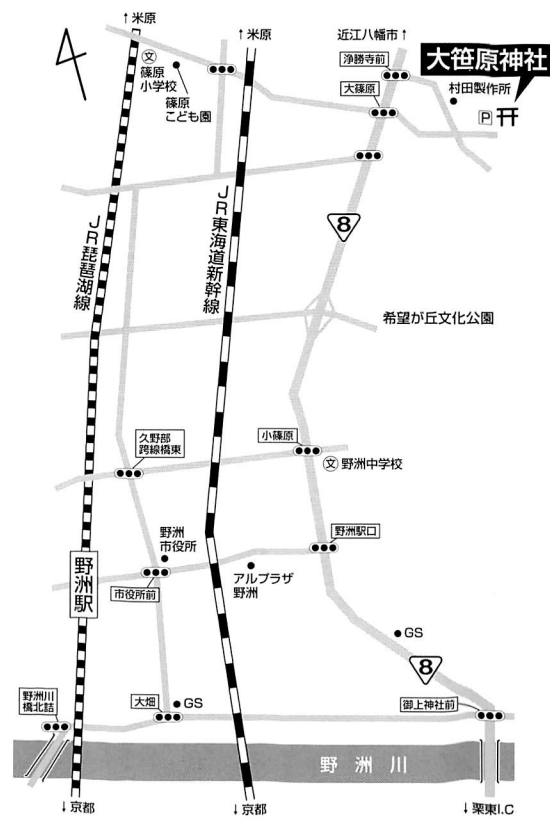


由緒略記

大笹原神社 (大篠原)



大笹原神社本殿 (国宝)



大笹原神社

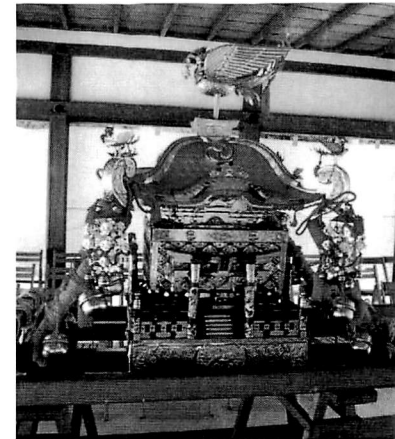
〒520-2313
滋賀県野洲市大篠原2375



境内社篠原神社本殿 (餅の宮) 重要文化財



境内



例大祭神輿



例大祭

この神社の場所は大篠原小字天徳で、この前方すなわち南一帯は小字「天王前」と申します。そこで明治の神仏判然令（明治元年三月、当時はまだ慶応四年といっていた。この神仏判然令が出てから排仏毀釈運動が起こる）が出るまでは天王さん（詳しくいえば牛頭天王社、それは京都東山区の祇園社、すなわち八坂神社と同じ祭神、素戔鳴尊・稲田比売命・その他）と申しました。はやり病（伝染病・流行病）を除く「徐疫神」としてまつられ、薬師如来の化身（神仏が形をかえてこの世にあらわれ、衆生の済度（さいど）をすること、うまれかわり）といわれ、また素戔鳴尊をその垂迹（すいじやく）といえます。だからここから近い岩蔵寺の薬師（重要文化財の木造薬師如来立像・鎌倉）さんとは一体の神社でございます。

ところが明治になって、大笹原神社と改称されました。実は大篠原神社と申し上げるべきが、この右（境内社）の篠原神社と同じ名もつけられませんので、シノ竹を、ササ竹にしてオオササワラ神社と名づけられました。

滋賀県には現在神社建築で国宝は八つございます（大津市の日吉神社西本宮本殿と拝殿・東本宮本殿と拝殿、竜王町苗村神社西本殿、びわ町竹生島の都久夫須麻神社本殿、野洲市の御上神社本殿と大笹原神社本殿）その中の一つがこの大笹原神社本殿でございます。

この神社は社伝によりますと、今より千年昔の寛和二年（九八六）に社殿が造営されたことになっていますが、現在の建物（桁行三間・梁行三間・一重・入母屋造・向拝・一間・檜皮葺）は室町時代の建築であります。そのことは応永二十一年（一四一四）の棟札（棟上の時、工事の由緒、建築の年月、建築者または工匠の名などを記して棟木に打ち付ける木製の札）によってわかりますし、また、領主馬淵広定の再建である事もわかります。全部の棟札二十一枚をも含めて国宝でございます。

この本殿は前から外陣・内陣・内内陣と分かれ、内内陣はさらに三室に分割してそれぞれに神座が設けられて居ます。外陣は床を一段低くし、建具なども開放的につくられているのに対して、内陣と内内陣は閉鎖的であります。

この本殿の特色は各所に配した彫刻の見事さでございます。外陣は花狭間格子戸、その上の透彫の欄間、向拝や母屋の正側面の各々柱間に挿入した暮股、それに脇障子に施された浮彫彫刻など、沢山ある県下の神社建築のうち装飾の豊富なことは第一であります。しかも、個々の彫刻は抑制されたなかにも力強さを發揮しており、優雅な姿とあいまって、室町時代建築のなかの優秀作でございます。

あの箱棟の上にサンゼンと光っている神紋は、申すまでもなく四目結（目結を四個並べた紋）で、それは近江源氏佐々木氏の紋でございます。そしてこの神社は大篠原の集落から大分遠くへはなれ、しかも、神社南面が定石とはいえず、集落をお尻にして建てられています。

そこでこの神社は、あの城山を守って居られるようでもあります。そこには佐々木氏の支流の砦（要塞）があったからでしょうが、それとも大篠原とは元は街道から遠くはなれた奥篠原の意味で、もとはこの神社を中心に集落が在ったのかとも思われます。いずれかにしても、在所からあまりにも離れ、街道からも離れていたことが、戦火は勿論、災害に遭わなかったのかとも思われます。

次にこの境内社の篠原神社本殿は国の重要文化財で、これも棟札によりますと応永三十四年（「上ふき」応永三十四年十一月秋）の墨書）に建つていたのでございます。この建築様式を春日造（切妻造・妻入・正面に廂をつけて向拝とし、棟に千木と堅魚木とを設ける、奈良の春日神社がその代表）と申します。

この神社は小さいが（一間社）、もともとはこの地の地主神（土地の守護神）で、村発生と共に在った神で、「往古より此所に御座候 当村氏神地主也 昔ささわら成時におきな夫婦きたれり、そしてこの地をひらき之を篠原大明神と申候」と社殿にございます。

ご祭神は餅の神様で、この辺は俗に篠原餅といわれる良質のモチ米の産地でございます、今も良質のオブラート（紙餅）はこの地のモチ米で作られると聞いています。

また餅のことは多くの本にも（後に記す）かかれています。この辺の田園は粳（うるち）を植えても糯米（もちこめ）になることも、ついで、この辺のモチ米の産地であること、この辺の田園はまた見事に市街地